シニア・コミュニティのゆくえ：
アメリカと日本における大学付属型高齢者住宅群

小　向　敦　子

Ⅰ．はじめに：高齢社会と高等教育が交差するコミュニティを尋ねて

Ⅱ．検証の方法：日米比較事例研究

Ⅲ．結果と考察

A. 現状の分析と統合

1. アメリカの動向

a. 私立大学の取り組み：スタンフォード大学

b. 州立大学の取り組み：フロリダ大学・ジョージア大学

c. 特色ある取り組み：イサカカレッジ・ラッセルカレッジ

2. 日本の動向

a. 国内初の取り組み：関西大学

b. リゾート地の取り組み：名桜大学

B. 今後の課題と展望：日本における独自性の探求

1. 地方大学とのリンク：地方の救世主となるシニア

2. 老人大学とのリンク：エイジズムを打破するために

3. エルダー・ホステルとのリンク：シニア交換遊学制度の構築

Ⅳ．まとめにかえて：大学街（univer-city）再興の兆候

Ⅰ．はじめに：高齢社会と高等教育が交差するコミュニティを尋ねて

先進諸国を、次々と見舞っている「大衆の長寿化」（mass longevity）は、必ずしも喜ばしいこととして、受け止められてはいない。日本では団塊世代による一斉退職の始まる 07 年が「2007 年問題」として冷厳な視線に晒され、アメリカではベイビー・ブーマーズが次第に高齢化を遂げていく現象が「銀禍」として杞憂されている。

しかし高齢社会を迎えることは、必ずしも「問題」や「禍」ばかりではない。一方で「シニアが所有するエネルギーは今後増加する唯一の天然資源」と、高齢社会を寿ぐ考え方もある[1]。「重要文化財」・「人間国宝」と呼ぶことが憚られるなら、「人生の達人」であると呼ぶことには異論がないであろうシニアを、社会が抱えられることのメリットは、決して少なくないはずである。

いずれにしてもシニアがどこで誰と、どのように現役後の長い人生を送り、そして最期を迎えるのか、このことが社会全体へ波紋を投げかけるであろう。本稿では、60 年代既に、大学・短大志願者数と入学者数が均等するために生じる「全入」を迎えたアメリカの大学が、近年になってシニアをキャンパスへ招き入れている事例を紹介しながら、09 年に全入が予測されている日本における大学と、シニアの動向を探る[2]。高齢社会と高等教育が交差するコミュニティを、それぞれが抱える懸念と希望という相反する性質を振り返りつつ、検討したい。

Ⅱ．検証の方法：日米比較事例研究

アメリカの大学で、リンク型シニア・コミュニティの創立が徐に始まったのは、90 年代に入ってからである。その後現在では、およそ 60 を数える大学に併設されている。

これらのシニア・コミュニティは、リンクする大学が私立であるか州立であるかによって、どのような違いがあるのだろうか。私立の例としてはスタンフォード大学、州立の例としてはフロリダ大学、ジョージア大学の現状を紹介する。また特徴のあるシニア・コミュニティとして、イサカ・カレッジとラッセル・カレッジの取り組みについても詳らかにする。

アメリカにおける動向を踏まえて「日本初」の銘を打つ関西大学に連携するシニア・コミュニティを探索する。続いて「日本最後の楽園」と呼ばれる沖縄のリゾート地に設置され、名桜大学に連携するコミュニティについても紹介する。

現状の検証に引き続いて、今後の課題と展望についても示唆したい。とりわけ本稿では (1) シニア学生が地方大学の救世主になれるか (2) シニア・コミュニティが老人大学に付随するエイジズムを打破できるか (3) 大学がエルダー・ホステルと連携してシニア交換遊学制度を構築できるか、の 3 項に焦点を当てる。

日本は、世界最長寿国としてギネスを更新し続ける「長寿のゴールド・メダリスト」であり、世界最速で社会が高齢化を遂げた「高齢化のフロント・ランナー」である[3]。加えて学びへの興味深さや励み努める姿勢を国民性として備え持つ、世界最高水準の基礎学力を有する生涯学習大国である[4]。

そうともなれば他の分野ならまだしも、高齢社会と高等教育の分野においては、どこぞの国の研究や方針に、追随する訳にはいかない。先鋒となり、世界が進むべき道を切り拓くのが、日本の果たすべき任務であるとさえ覚しい。大学と、そこへリンクするシニア・コミュニティの可能性と限界を、

熟考する必要性が高まっている。

Ⅲ. 結果と考察

A. 現状の分析と統合：アメリカと日本の事例

1. アメリカの動向

a. 私立大学の取り組み：スタンフォード大学

スタンフォード大学（Stanford University、1891 年創立）が、国内・外から優秀な学生および研究者を引き付けて放さない、全米屈指の名門私立大学であることについて、今更説明の必要はないであろう。そのスタンフォード大学のキャンパスへ、シニア・コミュニティが設営されている。クラシック・レジデント（Classic Resident, 以下 CC と表記）と呼ばれるこのコミュニティは、大学から 22.5 エイカー（1 acre ＝ 4,047 平方 m）の敷地をリースしたハイアット・コーポレーション（Hyatt Corporation）が、運営に当たっている。

CC では、2005 年のオープニングに 2 年先駆けた 2003 年、計画案を公表した。するとその時点で、388 あるうちの 311 居室がpre-（プレ） sold（ソールド）（仮契約）となった。スタンフォード大学の同窓生、同大学へ寄付をしてくれたことのある人、同大学の元教職員などの間で人気を博したようだが、手続きを取った人の中に、ノーベル賞受賞者や内閣次官（cabinet secretary）歴任者の名前があったことでも、話題となった [5]。

もう少し説明を費やそう。まず居室のタイプは主に、1 ベッドルーム（928 平方フィート、1 foot ＝ 30.48cm）から 3 ベッドルーム（4,212 平方フィート）である。3 ベッドルームの中には、寝室 3 部屋に加えてダイニングルーム・リビングルーム・ファミリールーム・キッチン・パントリー（食べ物や食器を入れておく倉庫）・デン（書斎・仕事部屋）・パティオ・デッキなどを含む特別仕様の豪華物件もある [6]。

CC に移り住むためにはまず、入居費を支払う。その額面の範囲は 600,000 から 3,900,000 ドルに及ぶ。入居費の他に、毎月納める費用もある。月額費（マンスリーフィー）と呼ばれるそれは、一人当たり 4,000 ドル、二人であれば 5,500 ドルである [7]。

月額費には、食費として 300 ドル（30 食分）、余暇・教養関連プログラムの参加費として 500 ドル、フィットネス関連プログラムの参加費として 100 ドル、ベッド・メイキング・サービス（毎週）として 60 ドル、そしてコミュニティの安全保障・維持諸経費として 600 ドル相当が含まれている。

CC では、コミュニティを退出する場合、前もって納めた入居費のおよそ 90％が返済される [8]。「ならば最初から入居費など、求めなければよいのでは？」との考え方もあるだろう。

実際に、長年スタンフォード大学に勤めて受け取った報酬を以ってしても、一介の教員・職員であれば、このような額の入居費を納めることは難しい。しかし敢えて、一番最初のハードルとも言うべき入居費を高く設定することには、それなりの意味があるようだ。いわばこの入居費が、巨額を払い込んでも支障のない階級に属していることを確める、スクリーニングやフィルタリングの機能を果たしていると言えるだろう。

明確にされる差異は、ハイ・ソサイエティであることをコミュニティ外へ知らしめると共に、コミュ

ニティ内の住人にとっては、一種の使命感を促す役割を担っているようである。実際に、ＣＣの住人の少なからずが、チャリティやボランティア精神とはランクの違うノブリス･オブリージュ (noblesse oblige、高い身分に伴う特別の義務感) を呈(てい)し、人脈を駆使してトークショーやパーティを企画するなど、大学を含む地域社会へ貢献している。

CC の秀英性は「食」を通じても、表現されている。夕食は通常フルコースであり、メイン・コースは、鳥・牛・豚・羊・魚などから選べるようになっている。(他に「定番」のメニューもあり、それを選んでもよい。) 塩分・脂肪分・糖分が控えめの健康志向(ヘルスコンシャス)のメニューもある。また食事を頂く環境としては、屋内にあるメイン・ダイニングをはじめ、外で食べられるアルフレスコ (alfresco、イタリア風) やビストロ・カフェ (bistro、フランス風) がある。

企画されているプログラムも、実に多彩である。まずフィットネス部門では、アクアエアロビ (水中運動を取り入れる) ・サルサエアロビ (ラテンリズムを取り入れる) ・ローインパクトエアロビ (衝撃度をさげる) ・ウォーキング・ヨガ・ストレッチ・太極拳などがある。

カルチャー部門では、水墨画・デッサン・フラワーアレンジメント・ビーズ作品作り・映画・演劇鑑賞のクラス。余暇･ゲーム部門では、スクラッブル (scrabble、語の綴り換えを競うゲーム)･ブリッジ (bridge、カード)・麻雀。また芸術部門ではバイオリン・ピアノ・声楽のリサイタル、更に教養講座として、コンピュータ・クラスやディスカッション・グループが編成されている。

CC では、ケアを必要とする住人への配慮も抜かりなく、継続的なケアが受けられるためのセンター（continuing-care retirement centers、以下 CCRC と表記）が置かれている。CCRC では要支援者向けの居室が 38、要介護者向けの居室が 44、そしてアルツハイマー患者向けの居室が 24 が準備されている 9)。

CC での月額費は、ケアを受けるようになっても基本的には変わらない。(但し介護食を日に 3 度作ってもらうような場合には、別途料金を支払う。) エデュ･テイメント（edu-tainment、education と entertainment を兼ね合わせた教養娯楽）を求める人とケアを求める人へ、それぞれの需要に応じるサービスを供給しようとするハイアット社のホスピタリティと矜持が表明されている。

さしずめ CC の拝命すべきキャッチ・フレーズは、選ばれた人たちが優れた環境の中で優れたサービスを享受する場所、とでも言えるだろうか。「選ばれた」や「優れた」という表現に語弊があるとすれば「中産階級以下の人々には縁もゆかりもない」と換言させてもらおう。

住人の交わす会話・好む音楽・まとう衣服など、ライフ・スタイルそのものが、コミュニティの付加価値になる。それは普通の人からみれば、「絵に描いたような」「夢の中に出てくる」羨望の的であるに違いない。

その一端でコミュニティには、諸手を挙げて賞賛し切れないダーク・サイドが控えている。「良い」要素が次から次へと足し算される「ウイン・ウイン・コミュニティ」とやらは、下から支える大衆という踏み台があって初めて形成される。その世俗に対して真っ向から一線を画す、このような隔離地帯は正しく格差社会の縮図(ミニチュア)である。スタンフォード（アカデミズム最高峰）・シリコンバレー（ビジネス最先端）、そしてハイアットといういずれ劣らぬ、全米と言うよりは世界規模のブランド力を用いて、要するに「世界中の富豪を集めてしまえ」という魂胆が見え隠れしている。

翻って、同じ地球の裏側には、紛争や天災により余儀なく難民となったシニア、エイズに罹った子ども夫婦を看病しながら孫を育てているシニア、就業人口が都市部に流れ込み過疎地へ置き去りにされたシニア、が溢れている[10]。また高齢化に対する社会保障制度が不備な国々では、収入が無いために物乞いになるシニア、体力が弱っているのに衛生・栄養状態の悪い環境に放たれ、後回しにされる事はあっても優先される事の無いシニア、が苦痛に顔を歪めている[11]。

周囲の人々から眼を細められるほど、眩しく輝くコミュニティは、自らの背後へ届くはずだった光を遮り、その替わりに、どす黒い影を落としてはいないだろうか。有頂天にはなり切れない、推敲の余地が残されている。

b. 州立大学の取り組み：フロリダ大学・ジョージア大学

フロリダ大学（University of Florida、1866 年創立）は、州内で随一の規模と、最も長い歴史を有する大学である。当大学にリンクして 2004 年、136 エイカーの敷地を有するシニア・コミュニティ「オーク・ハンモック (Oak Hammock、以下 OH と表記)」が設立された。キャンパスへは 2 マイル (1mile=1.6093km) ほどの距離にあり、両者を繋ぐシャトル・バスが運行されている。

OH にはおよそ 200 の居室（ルーム）と 50 の一戸建て（ハウス）がある。居室のサイズは 800 平方フィート（1 ベッドルーム）から 2,014 平方フィート（3 ベッドルーム）まで。ハウスの中には 2,350 平方フィートの広さの物件もある。また CCRC が置かれており、37 ベッドが要支援、42 ベッドは要介護用に確保されている。

入居費の分布は 140,000 から 460,000 ドル、月額費用は 1,200 から 3,500 ドル相当である。月額費の中には、170 ドル相当の食費が含まれている。またプール・テニスコート・ヘルスクラブなど、コミュニティの施設を利用できるようになっている[12]。

OH の運営は Oak Hammock at the University of Florida, Inc.（NPO）が担当しており、大学との間で、密接な提携が図られている。とくにレジデントに対する学習活動は Institute for Learning in Retirement (「退職後の学びの会」以下 ILR と表記。NPO) が采配を揮（ふる）っている。ILR はもともと、教職に付いていた人たちが、退職後に自分たちが参加できる学習の仕組を作ろうとして、結成された団体である[13]。

ILR が提供する講座は「今日の科学」「オペラを楽しむ」など時事性に優れた教養科目がある一方で、「歴史」「哲学」など定番（オーソドックス）のコースもある。受講料は、1 コース（全 6 回程度）で 20 ドル、2 コースであれば 30 ドル、一学期に 3 コース以上履修すれば、なべて 40 ドル、が相場である[14]。

学習活動はさらに、エルダーホステル・インスティチュート・ネットワーク (Elderhostel Institute Network、以下 EIN と表記。NPO) によっても推進されている。EIN と連携することで、住人は「旅をしながら学ぶ」コースへ参加できるようになった。一方ホステル会員にとっては、必ずしも旅へ赴くことなしに、OH のレジデントと共に学習できることが、利点となった[15]。

OH のライフ・スタイルは、クラシック・レジデンスの豪華さに比べれば、見劣りする観がある。しかしアメリカ社会全体からみれば「中の上（アッパーミドル）」に属すると言えるだろう。

もうひとつ、州立大学へリンクするシニア・コミュニティの例を挙げておこう。全米初の州立大学

として創立されたジョージア大学（University of Georgia、1785 年創立）には、ジョージア・クラブ（Georgia Club、以下ＧＣと表記）が置かれている。GC の特徴は、レジデントがゴルフ場内に暮らしていることである。

1,200 エイカーに及ぶ当コミュニティの運営は、ジョージア・クラブランド・カンパニー（Georgia Club Land Company、以下 GCLC と表記）が務める[16]。ただし 800 軒ある住宅の建設については、13 の建設会社（ビルダー）が区画ごとにそれぞれ担当している。

住宅の規模は、2,400 平方フィートから 1 エイカー、価格は 400,000 ドルから 1 ミリオンを越えるものまである[17]。GC の魅力は、レジデントにもれなく「ガレージからカートに乗って、直接ゴルフ場へ出かける」優越感が付いてくることであろう。GC には、かつての日本に見受けられた「盆栽いじり」や「孫の相手」に代表される「隠居モデル」とは趣を異にする、ゴルフ場と大学キャンパスを遊び場とするシニアの姿が溢れている。

「ゴルフ保養地」としてのイメージを掲げたいフロリダ州では、ジョージア大学から遠くないジョージア工科大学（Georgia Institute of Technology、1885 年創立）へも、更に豪華なゴルフ・コミュニティ（ジョージア・テック・クラブ、Georgia Tech Club）を構築している[18]。社会のサービスに依存する受身的な客体にも、果たすべき役割のある自立的な主体にもなれるシニアを巡って、州行政による思惑が浮沈（ふちん）しているようである。

c. 特色ある取り組み：イサカカレッジ・ラッセルカレッジ

イサカ・カレッジ（Ithaca College、1892 年創立）は、ニューヨーク州にある中規模私立大学である[19]。そしてそのイサカ･カレッジにリンクして、低所得者が利用できることが特徴のロングビュー･コミュニティ（Longview community、1999 年創立。以下 LL と表記）がある。

LL では、住人が入居費を払わずに、月額費だけで在住できる。居室（161 部屋）のタイプは、スタジオ、1 ベッドルーム、2 ベッドルームの 3 種であり、月額費は 1,537 ドルから 3,902 ドルの範囲に抑えられている。（1 ベッドルームを、2 人で利用することも認められている。）

月額費には 1 日 1 食分の食費が含まれる。プール・エクササイズ・リズム体操、詩や粘土や絵のクラス、ゲーム・料理・編み物のクラスにも参加できる。入居希望者が多く、部屋が空くまで数ヶ月待たなければならないことが、唯一の難点のようである[20]。

イサカ・カレッジによって示される、コミュニティに対する力強い支援体制も、住人にとっての魅力となっている。カレッジでは、住人が大学生と一緒に授業を受けられる、図書館やフィットネス・センターなど、カレッジの施設を利用できる。また大学が主催する芸術の祭典やスポーツの試合など、様々なイベントへも参加できる[21]。一般学生に調和してシニア学生が大学生活を満喫する姿は、既にキャンパスの風景となっている。

LC にも、CCRC が置かれており、60 居室が確保されている。それらはアダルト・ホームと呼ばれ、（必要に応じて）洗濯や（週 2 回の）入浴サービスを受けられる。食事が 3 食準備されるようになっているため、通常の居室には付いているキッチンの設備はないが、小さな冷蔵庫と流し台がある[22]。

居室にキッチンがないのは「どうせ食事は賄われるのだから」と、余計な無駄を省いたつもりの設

計であろうか。しかし住人が、自分のためでなくとも来客に対して、何かを振舞ってもてなすことができるように、本来の「家」が持つキッチンの機能は、利用頻度の多少に関わらず、そのまま残しておく配慮が所望される。

アダルト・ホームでは、一人あたり 2,465 ドルの月額費と 1,110 ドルの補足的予備費（supplemental security）が必要になる[23]。低所得者が入居できるように創られた LC であるが、ケアラーに 24 時間体制で勤務してもらうホームでの「割り増し」は、止む得ない事情であろう。「自立して生きていけることが、どの人の人生においても、何よりの節約方法」である、と改めて思い知らされる現実の一齣である。

もう一例、特色あるシニア・コミュニティを挙げておこう。マサチューセッツ州に、1851 年創立のラッセル・カレッジ（Lasell College、私立）がある。学生数が 1,200 名程度と、比較的「小規模」と呼べる大学母体に対して、比較的「大きな」構えのラッセル・ビレッジ（Lasell Village、2000 年創立）がリンクしている[24]。

13 エイカーにおよぶビレッジには、225 の居室がある。タイプは主に、1 ベッドルーム（545 ～ 1,145 平方フィート）と 2 ベッドルーム（1,175 ～ 1,933 平方フィート）で、入居費は 300,000 ドルから 750,000 ドル、月額費は 2,500 ドルから 3,000 ドルに分布している[25]。ビレッジには CCRC もあり、ケアが必要なレジデント向けに 38 居室が準備されている。

ラッセル・ビレッジの最大の特徴は、年間少なくとも 450 時間の教養科目と、フィットネス関連のクラスが供給されていることである。しかもこれらのクラスは、講義形式の他に、リサーチを行なう、研修旅行へ出向くなど、バラエティに富む内容となっている[26]。

コミュニティが目指す「人生を卒業するまで学び続けられる」知的環境が、入居者へ心身の充実感を齎している成果であろうか。「入居者（210 名）の平均年齢が 83 歳であるにもかかわらず、彼らの中で介護を必要とする人は僅か 5 名に留まっている」と新聞記事は伝えている[27]。

これまで、私立であるか公立であるか、もしくは入居費・月額費が高いか低いかという座標軸で、アメリカの大学にリンクするシニア・コミュニティの特徴、および特長を紹介してきた。この潮流が、日本へもいよいよ「上陸」しようとしており、次に紹介したい。

2. 日本の動向

a. 国内初の取り組み：関西大学

日本における大学リンク型シニア・コミュニティの第一号が 2008 年、開幕の運びとなっている。コミュニティの名称は「アンクラージュ御影」で、イタリア人建築家ルイジ・ヴェラーティ（Lvigi Velati、61 年ミラノ生まれ）が設計を担当した、高級ホテルを思わせる佇（たたず）まいとなっている。

アンクラージュ御影の居室（218 戸）サイズは、51.5 ～ 134.45 平方メートルに及ぶ。介護付有料老人ホーム（63 戸）も準備されており、それらのサイズは 25.09 ～ 27.47 平方メートルである。

設備としてはクリニック・露天風呂付展望大浴場・岩盤浴・麻雀ルーム・カラオケ・ミニシアター・多目的ホール・プール・フィットネスルーム・スパゾーン・ミニショップ・屋上庭園・屋上菜園・BBQ 広場などがある。食事は、京料理の老舗で修行を積んだ一流料理長が担当するダイニングを始

めとして、バーやティー・ラウンジもある[28]。

住宅の提供と運営は、株式会社アンクラージュ（兵庫県尼崎市、小中村政廣社長）が、プログラムの企画・運営、ノウハウ・先行情報の提供は、財団法人社会開発研究センター（東京都港区、村田祐之理事長）が担当する。リンクする大学は、前身である関西法律学校の創立（1886 年）に端緒を開き、現在では学部生 2 万 7 千人を擁する関西大学（大阪府吹田市、芝井敬司学長）である。

コミュニティが掲げる「知的好奇心を持つ人の縁で結ばれた知縁コミュニティ」のテーマに違(たが)わず、アンクラージュ御影では住人が、関西大学の文学部および文学研究科（大学院）で、科目等履修生・聴講生・社会人学生として学ぶことができる。同時に、シンポジウムやイベントなど、行事へも参加できる[29]。

シニアの中には、古典や海外の作品も含めて、文学に対して年来の興味と関心を持ち、親しんできた人が多い。ややもすればシニアと接続されがちな福祉や医療の分野ではなく、彼らにとってのあくなき探求の的となってきた文学という領域を、コミュニティとリンクした発想は斬新である。「日本初」を謳うコミュニティが、今後は世界に向けて「日本発」の取り組みに、果敢に挑戦してくれることへ期待が寄せられる。

b. リゾート地の取り組み：名桜大学

「地上の楽園」と呼び声の高い沖縄県、そして「沖縄最後の楽園」と言われる名護市（沖縄本島北部）にシニア・コミュニティの構想がある。カヌチャ・リブリオ（2009 年開幕予定）と呼ばれるそれは、那覇空港より車で 90 分、北にやんばるの常緑樹、南に太平洋を望む、国内屈指の保養地「カヌチャ・リゾートエリア」に隣接する[30]。カヌチャは漢字で「神着」、この地にある美しい砂浜「かぬしちゃぬ浜」にも由来している。

カヌチャ・リブリオでは、12 万平方メートルに及ぶ敷地に、総戸数 517 戸のコンドミニアムと一戸建て（広さは 60 ～ 100 平方メートル）が建設されつつある。入居者は入会金・預託金を支払い、一身専属的会員権を購入する。入会金は 1 名 650 万円、2 名では 2 倍になる。預託金は 15 年で均等売却されるため、15 年以内に入会契約を解除した場合は、未償却分を返還してもらえる。その額面は 2,600 から 7,170 万円までと、少なくない開きが付けられている。

晴れて入居者となり、生活を始めるに当たっては毎月、管理費を納める。管理費は 1 名 136,000 円、2 名では 213,000 円である。「スパ・トライアングル」（食事・運動・エステを組み合わせたプログラム）をはじめとするカルチャー・スポーツ・レクリエーションが準備されている。また健康面に対しては、ホームドクターと看護師が入居者への指導や相談を行う予定である。

介護が必要となった場合には、コミュニティ内の有料老人ホーム「リブリオそよ風」へ入居できる。「そよ風」では（月額）管理費 175,350 円と食費 59,850 円（1 日 3 食 ×30 日の場合）が必要になる。40 室（28 平方メートル、全て個室）には、スタッフ・看護師が 24 H常駐する。

リブリオと連携するのは、名桜(めいおう)大学（名護市、瀬名波榮喜学長。1994 年創立）である。大学では、多くの経験を持つ入居者が講師となって教壇に立ち、現役の学生に「伝える」役目を担う企画もある。

近年、シニアの間では「老後は住み慣れた家で、孫と一緒に」という、既成のパターンに埋もれな

い、老後の過ごし方への模索が続いている。沖縄への転居は、異文化に加えて異言語体験にもなる。「沖縄言葉（うちなーぐち）」と呼ばれるそれらは例えば、よーんなよーんな（ゆっくりゆっくり）なんくるないさ（なんとかなるさ）、えいさあ（沖縄本島の盆踊り）、さんしん（三線）、やちむん（焼き物）などである。国内に居ながら擬似留学体験を楽しめるのは、シニアにとって「もうひとつ」の魅力ではないだろうか。

シニアが最期まで輝いて生きるために、快適と介護の両立に細心が尽くされるリゾート型シニア・コミュニティ[31]。自由になるお金と時間を持たない若者が、見たら聞いたら、せめて羨望のため息を洩らすことができるクオリティ・オブ・シニア・ライフの設計図が、引かれ始めている[32]。

B. 今後の課題と展望：日本における独自性の探求

1. 地方大学とのリンク：地方の救世主となるシニア

日本の大学にとって、リンク型シニア・コミュニティを構築しようとする際に、ボトルネックとなるのは、充分な土地のないことであろう。しかし土地に関する事情は、郊外へ行くと激変する。地方は驚くほど潤沢な土地に恵まれており、振り返ればそのような土地から60年代に都市部へ上京（流出）し核家族を構成したのが、今時のシニアである。彼らが現役からの引退を機に、生まれ故郷へのUターン（Iターンの場合もある）を企図する傾向は、却って必然であるとさえ言える。

一方、18歳人口を中心とする学生を思うように集められずに、経営の不振に頭を抱えている地方大学にとって、シニア勢の帰省は吉報となる。それどころか、一度は企業に奪われた地元の人材を、退職後に引き戻せる大学が、そうできない大学を圧する形勢となり、ここにシニアが何処の大学を選ぶかで決まる、大学間の下克上と、ひいては大学の倒産というシナリオまで出来上がる。

そうともなれば地方の大学では、例えば畑を利用して、そばの種を撒く・収穫する・挽（ひ）く・料理（賞味）する形式のフィールド学習ができる。また海に近い大学では、シニアにとっての永遠の憧れであるマリン・スポーツ（例えばクルージング・ヨット・カヌー・ダイビング・シュノーケリング・サーフィン）に取り組むことができるだろう[33]。

またキャンパスの近隣に民宿・ペンション・山小屋・海の家などがあれば、敢えて新たにシニア・コミュニティを創立するまでもなく、そのまま彼らと大学がリンクできる。地元の観光関連業者は、大学との連携によって、近年羽振りの良かった大型ホテル群に挑戦状を叩きつけられる。彼らの再起が叶えば、そのことがシニアにとっては個人所有が憧れだった別荘を、管理人付きで利用できる豪奢（ごうしゃ）を味わえることになる。

現在は介護と無縁でも、将来の健康に確信を持てないシニア世代にとって、子どもが独立した後、老夫婦二人あるいは老親一人で住むには、段差だらけの家と手入れの欠かせない庭が、心配の種になり始めている[34]。それより、庭の草むしりがない、鍵一つで外出できる、雨戸の開け閉めがない、エレベーターがある、暖房・照明の節約ができる、そして何と言っても学習環境と医療ケアに近いのが、大学リンク型コミュニティである[35]。

シニア・コミュニティは、地方にある大学だけの特権ではないことも、記述しておく必要がある。昨今都市部では、老番（つがい）向けの高層マンションが開発・販売のラッシュを迎えている。自然の恩寵（おんちょう）に替わ

る、音楽・演劇・工芸・美術・エステ・スポーツなど、可能性の海や森なら無限にあるのが、都市部の特徴である。従って例えば、天然の温泉とは趣向の異なる、プログラムとしてのハイドロ・フィットネス（温泉のようなものを利用するフィットネス）などを行えば、話題性にも恵まれるのではないだろうか。

2. 老人大学とのリンク：エイジズムを打破するために

学生層として若者が中心を占める通常の大学と区別して、シニア層が在籍する大学は、老人大学やシニア大学と呼ばれる。このような大学は「どうせ鶴さん亀さんが行くところ」「何が寿大学だ。ちいちいぱっぱをやっているだけのくせに」という蔑視に耐えてきた観がある。冴えないイメージとは裏腹に、現実は興味深い活動を行っている老人大学が、少なくないにも関わらず。

シニア・コミュニティには、老人大学の汚名を雪ぎ、係るエイジズムに対峙できる可能性が秘められている。まずコミュニティでは大学が媒介項となって、祖父母世代と孫の年齢に近い大学生との、隔世代交流が促進される。シニアはいよいよ、シニアになるまで守り抜いてきた知識と技術を、次世代へ伝承する機会と場所を授けられたことになる。

「今時の若い者は」「俺の若い頃は」に始まる愚痴や過去依存の話に、もはや聞き耳を立てる者はいない。それよりシニアであれば、暇と手間のかかる一銭の特にもならない雑役にさえ、惜しみなく円熟した智恵と、巧みな技を注ぐことができる。

そんなシニアがもし若者と、良い意味で「結託」すれば、古くて新しいオール・デイズの音楽に酔えるライブハウス、一晩中でも蘊蓄を傾ける「日替わり」名物マスターがいるカフェテリア、大きな映画館では上映されない面白い映画が見られるシアターなど、今まで大学の施設にありそうでなかった環境を作りだせるのではないだろうか。青春を謳歌する若者と青春をやり直そうとする兵が、自然に袖を交えては意気投合する場面が、大学とコミュニティの一隅にあったら、どんなに素敵なことだろう。

3. エルダー・ホステルとのリンク：シニア交換遊学制度の構築

今時のシニアが、かつてのどの前代のシニアより、知的好奇心に溢れ、しかも元気であることは誰の目にも明らかであろう。だとすればデイケア・センターや病院の待合室より、シニアが集うに相応しい活動の本拠地を、創出していかなければならない。

近年の社会調査では、シニアが「やりたいと思っていること」の筆頭に「旅行」が挙げられている[36]。ならば、旅行することを実習・研修と位置づけて、観光学部における単位や学位が発行できるだろう。シニアにとっては夢を体現することで「旅のエキスパート」を認定してもらえる、いわば旅行専門学科である。

その際に大学は、エルダー・ホステルが持つプログラムを活用させてもらう。エルダー・ホステルは、従来は若者向けであったヨーロッパのユース・ホステルおよびスカンジナビアのフォーク・スクールの活動を、シニア向けとした、発想の転換によって 75 年にアメリカで創立された[37]。

現在では、旅・学び・出会いの 3 要素をモットーとし、手に「ノートとペン」を持って進行するプログラムに、年間 25 万人（50 ヶ国）が参加している[38]。経歴・学歴を問わないので誰でもプログラ

ムに参加できる。その代わりに単位や学位は出さないことが基本姿勢であるが、知徳を何物にも代替できない個人の富として尊ぶ文化を共有する日本では、却って資格や卒業証書を発行すれば、動機付けになるのではないだろうか。

アラスカ大学でアラスカの自然に関して学ぶ、ハワイ大学でポリネシア文化に関して学ぶなど、既にあるエルダー・ホステルのプログラムを利用しながら、短期の旅行型に加えて中期・長期のステイ型のプログラムを準備できれば、シニア交換遊学カリキュラムの構築も、単なる夢物語ではなくなる[39]。

そして近い将来、大学リンク型シニア・コミュニティが世界的趨勢となって発展すれば、コミュニティを通じて海外にある大学がリンクし、世界のレジデントとホステラーとが交歓を深められる。海外へ、そして海外から、シニアが国境という垣根をやすやすと、わらわらと越えるようになるだろう。

Ⅳ．まとめにかえて：大学街（univer-city）再興の兆候

近年は、どういう人が隣に住んでいるか見たこともない、近所付き合いの冷却期にある。しかしこのような「隣人は何をする人ぞ」の果てに迎えるのが、隣に住む人がかけがえのない同志になる人造交流促進コミュニティではないだろうか。

家族の絆が薄っぺらになり孤老が増えているときに、隣住というよりは、同じコミュニティ内で暮らす擬似家族的なコムラデ（camaraderie、友愛）意識が見直される。「血は水よりも濃い」と言われる一端で、「遠くの親戚より近くの他人」「弱き絆の強さ、強き絆の弱さ」と言われる地縁関係の頼もしさがある。

コミュニティの仲間は、「同じ釜の飯を食う」ことに加えて、同じカリキュラムやプログラムで学び・遊び、そして同じコミュニティの一角でお世話になりながら死ぬ「同じ穴の狢（むじな）」である。「歳をとってから親友は見つけにくい」と言われるが、人生における他のどの時期よりも、助けを必要とする時を共に過ごす仲間には、血縁を補って余りある紐帯（ちゅうたい）が育まれるのではないだろうか。

また今まで私たちは同窓生（アルミナイ）の持てる実力に、無頓着でいたようである。1万人や10万人など、数だけ参加している面々が、もし実際の行動力とスポンサー意識と持てば、未だかつてなかったような組織になれる。実際にアメリカでは、自分の終焉を看取ってくれた「終の住処」へ遺産を寄付するシニアがおり、このような風潮が日本へも根付けば、大学とコミュニティにとっては、貴重なよすがとなるだろう[40]。

長い間「通過される学舎」として受け止められてきた大学は、リンクするコミュニティを伴って「無二の所在」へと、変貌を遂げようとしている。死から眼をそらさずにしっかりと受け止める、大学にとってこれほどの出口保証はないだろう。そしてコミュニティを運営する企業にとって、これ以上のトータル・サービスはないだろう。

今まではリバーサイドや公園前に人気のあったコミュニティであるが、これからは大学キャンパスやその近郊が、人気のスポットになりえる。当今、大学が中軸（ハブ）となって異世代交流が促進される古き良き大学街（univer-city）復興の兆候が広まっている。シニア・コミュニティは、高等教育における隆替（りゅうたい）を賭す改革であると同時に、シニア層の厚さとそれぞれの老後の長さを鑑みれば、シニア・ビジネスにおける一大モデルにもなるであろう。

【注・参考文献】

1) 桃井緑美子訳「賢知の時代」共同通信社。2000 年。Theodore Rozak, America the Wise, 1997. 115 頁。

2) 日本経済新聞。2006 年。6 月 22 日。

3) (http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/1620.html)。世界保健機構が毎年発表している平均寿命と健康寿命の双方において、男女共にほぼ毎年、日本は世界第一位。また日本は、高齢化社会（高齢者人口比率が 7%以上 14%未満）から高齢社会（同比率が 14%以上 21%未満）まで 24 年で辿り着いた。因みにフランスは 115 年、スエーデンは 85 年、イギリスは 47 年、ドイツは 40 年を要し、アメリカは推計値で、71 年かかる予定。一番ケ瀬康子編「新・社会福祉とは何か」ミネルヴァ書房。2001 年。137 頁。

4) 子どもは、学校･学習塾へ通う他に、幼少の頃から習い事を始める。義務教育の修了率は全青少年の 99%以上で、そのうち約 95%が高校へ進学する。母親たちも、育児・家事の合間をぬってカルチャー・スクールやサークル活動に参加して、教養に磨きをかけている。瀬沼克彰「生涯学習と地域活性化」大明堂。1999 年。93 頁。

5) (http://sanfrancisco.bizjournals.com/)。カリフォルニア州のパロアルトに開設されている。

6) (http://muratainc.com)

7) (http://daily.stanford.edu/) 2005 年。11 月 18 日。

8) (http://www.hyattclassic.com/)

9) (http://www.paweekly.com/)

10) 桜井緑美子訳「賢知の時代」共同通信社。2000 年。Theodore Rozak, America the Wise, 1997. 330 頁。信濃毎日新聞。2002 年。8 月 6 日。

11) 読売新聞。2002 年。5 月 21 日。

12) (http://ww.newsherald.com/)

13) (http://www/elderhostel.org/ein/)

14) (http:/www.oakhammock.org/)

15) (http://www/elderhostel.org/ein/)

16) GCLC は LLLP (limited liability limited partnership)。和訳では「有限責任 (有限) 事業組合」が適宜であろう。

17) (http://www.thegeorgiaclub.com/)

18) (http://www.georgiatechclub.com/)

19) (http://www/ithaca.edu/)

20) (http://www/ithacalongview.com/)

21) (http://www/ithacalongview.com/)

22) (http://www.oakhammock.org/)

23) (http//www/ithacalongview.com/)

24) (http://www.lasell.edu/)

25) (http://www/lasellvillage.com/html/) (http://www.oakhammock.org/)

26) (http://www.harvardmagazin.com/)

27) 毎日新聞 (大阪)。2006 年。9 月 20 日。

28) (http://encourage.co.jp/)。アンクラージュ (仏) は「勇気」の意味。

29) (http:/muratainc.com/) 日本経済新聞。2007 年。7 月 7 日。

30) リブリオは RE(再び)BRIO(元気、イタリア語) の意味。運営はカヌチャ・コミュニティ (株) が行う。春山満「それぞれが幸福な死を迎えるために」扶桑社。2001 年。46 頁。

31) (http://www.goodtime.ne.jp/community/plan.html)。カヌチャ GTI 大阪事務局編集・発行「グットタイム No.2」2003 年。2 月 14 日発行。7 頁。

32) 東北福祉大学の近隣には、特別養護老人ホームやデイケア・センターなどの施設郡がある。また佛教大学・立正大学で、それぞれ和順(わじゅん)の里・たちばなホームが関わりを持って運営されている。但し社会福祉実習に学生が来る、落ち研が遊びに来る、学生が音楽会を開くという程度の交流に留まっている。

33) 実際シニアは、小さい時に川遊びが好きだったなど、自分でも知らぬまにウォーター・スポーツの基本を身に付けている人が多い。日本経済新聞。2003 年。5 月 4 日。

34) 日経産業新聞。2003 年。5 月 29 日。

35) 沖藤典子「シニアいきいき納得ライフ」佼成出版社。2003 年。20 頁。

36) 東京・大阪・名古屋圏に在住の 60-69 歳の男女を対象として、(株) 日本通信教育連盟が行った「シニア世代実態調査」(04 年調査) では「どのように過ごしたいか」との質問に対して、1 位の「趣味を楽しむ」に続いて、2 位に国内旅行、4 位に海外旅行が挙げられた。生活情報センター編集・発行「熟年・シニアの暮らしと生活意識データ集 2006 年版」2006 年。82 頁。

37) 遠藤克弥「最新アメリカの生涯学習」川島書店。1999 年。99 頁。

38) 日本経済新聞 (夕刊)。2003 年。11 月 10 日。

39) (http://www.elder.or.jp)。日本では 86 年に、エルダー・ホステル協会 (NPO 法人、大阪) が設立された。国内講座・海外講座・日本学講座 (海外ホステラーが、史跡・施設の見学・市民との歓談を通じて日本への理解を深める) が開催されている。

40) (http://www.umich.edu/) (http://www.bluehilldevelopment.com/)

Where and How the Baby Boomers Spend their Second Lives: A Study of Senior Communities with Linkages to Universities

Atsuko Komukai

Abstract

I. Introduction: Where community and university intersect

II. Method : Comparative case studies in the U.S. and Japan

III. Result :

A. Present Conditions

1. Developing movement in the U.S.

2. Developing movement in Japan

B. Perspectives and Concerns for the Future

IV. Conclusion: Revival of univer-city

In recent years, the effects of “mass longevity” have been spreading among developed countries. These effects can be seen as both positive and negative.

In Japan, the massive retirement by baby boomers at the age of sixty is spoken of as the "2007 problem" ; the ageing of America’s baby boomers is described there as the “grey peril.” There is no doubt that where and how seniors spend their long-lasting second lives will profoundly influence the whole society. Demographic change, as this paper demonstrates, also presents society with a range of new and interesting possibilities, as the needs and lifestyle preferences of its seniors come to be met by new institutional alliances.

This paper will first introduce the cases of senior communities that are managed with strong ties to universities. It then investigates the developing collaboration between the two fields of higher education and business for seniors. It concludes with perspectives and concerns about the future of education in the ageing society.